理　事　長　所　信

２０１５年度（第６５年度）

公益社団法人 名古屋青年会議所

公益社団法人　名古屋青年会議所　理事長所信

公益社団法人名古屋青年会議所
第６５代理事長　杉　浦　　卓

～ 知 行 合 一 ～

一人ひとりが名古屋の課題を語り合い、
一人ひとりの朧げなアイデアを紡いで知恵に変え、
全員一致での行動が実現したとき、
「名古屋プライド」は覚醒し、日本はもっと元気になれる。

【はじめに】

我々は一体何者なのか。

我々は、日本国に住まい、この名古屋のまちを形成する源である。一人の人間として家族という最小のコミュニティを形成し、地域や企業を構成し、名古屋のまちが成り立っている。我々一人ひとりが存在しない限り、日本という国は勿論、名古屋のまちも存続することができない尊い存在であると同時に、国やまちの未来を創造する重責を担う存在でもある。

これらを考えた上で、我々一人ひとりの使命的課題とは何なのか。それは、それぞれのライフステージにおける課題解決に終始することなく、先達が連綿と受け継いできた国やまちに感謝しつつ、名古屋の問題を自分事と置き換え、名古屋のまちをより進化させ、次代へと継承させるべく果敢な挑戦を続けていくことである。

このことを踏まえ実践するにあたり、必要不可欠なエネルギーとは何なのか。それは、誰もが生まれながらにして持つ人間としての尊厳であり、己と国やまちに対する根本的な自信と誇りともいうべき「プライド」である。この「プライド」こそが､我々に己の「役割」と国やまちの「あり方」を自覚させ、将来に向けて無限の行動力を生み出す「志」を確立させる。

様々な問題を誰かのせいにして諦めることはもう終わりにしよう。誰かに頼るのではなく、自分に何ができるかを考えよう。己とまちに対する自信と誇り、「名古屋プライド」を覚醒し、一人ひとりが主役であることを自覚して、行政任せではない市民ボトムアップ型の連携運動を実践していこう。そして、当事者意識が漲り「プライド」に裏付けられた強靭な「志」を併せ持つ人と企業による「日本を支える名古屋」を実現しよう。

【誇りある団体へ加速しよう】

「男子、難きは避けず易きは求めず。人生は道標なき暗夜行路、志ある所に信は通じる」

これは、私が物心付いた時から父に刷り込まれてきた言葉である。誰の人生にも等しく試練は与えられるものであり、その試練を避けることなく受け入れ、果敢に挑戦することで人生の活路を見出せる。そして、その活力の源となるのは己が持つ志である。志持たずして大きな夢は実現できない。私はこれまでの人生を振り返り、挫折や苦悩を目前とした時、この言葉を思い出し己を奮い立たせてきた。今振り返ると、結果が伴わなかった場合においても、挑戦をしたプロセスが経験として培われてきているのだと思う。それは名古屋青年会議所初代理事長 大隈孝一先輩がおっしゃった「結果よりもプロセスを尊べ」の言葉に通ずるものであり、これこそが私の今日までの青年会議所運動に対する挑戦の原点である。

今、どれだけの会員が胸を張って青年会議所活動を行っているだろうか。会社の仲間や家族には、自信を持って活動の内容を話すことができているだろうか。「青年会議所とはどのような団体か」という問いに即答できるだろうか。ややもすれば、インターネットや巷に溢れる青年会議所に対するネガティブキャンペーンすら論破することができず、どこか後ろめたい想いを抱えながら活動を続けてはいないだろうか。現役会員自らが先頭に立ち、「青年会議所運動に興味などない」と喧伝し、学びや成長の機会である「船」に乗り込む会員の梯子を外すような行動をしていないだろうか。

ここで、今一度問い直してみて欲しい。何故自分が青年会議所に身を置いているのか。ともに過ごす大切な時間を割きながらもあなたを青年会議所へと送り出してくれる会社の仲間や家族は何を期待しているのか。それはあなたが地域や企業の発展に寄与できる器の大きな人材となり、何処かの誰かのために無我夢中に活動する背中を見せることで格好良い親に成長してくれることを期待しているのではないだろうか。我々は決して一人で活動しているのではない。自身を取り巻く多くの人たちの協力と希望があってこそ活動できることを一時たりとも忘れてはならない。

その上で重要なことは、我々一人ひとりの主語が「俺」や「私」から「まち」や「人」へと変わってきたのと同じように、我々はＪＡＹＣＥＥの志を元に多くの市民の心を動かすことができる独立自尊で唯一無二の青年経済人の団体である気概を持つことである。人の心を動かすこと、それはまさしく「運動」である。この「運動」への想いが名古屋青年会議所全会員の心に浸透した時、我々は責任世代のリーダーが集い学び合うことで成長し、市民とともに名古屋の未来を創造することができる「誇りある団体」へと昇華することができるのである。

【戦後７０年という歳月を迎えて】

人類の歴史上、最初で最後となっている原子爆弾が投下された大東亜戦争（第二次世界大戦）の終結後、７０年の歳月を迎えようとしている。

先達は、焼け野原となった祖国の姿とＧＨＱによる戦後処理を突き付けられ、日本人としての自信と誇りを木端微塵に打ち砕かれた。悠久の歴史に受け継がれた我々の歴史観と道徳心は封印され、押し付けられた現在の日本国憲法や１１宮家の皇籍離脱をはじめ「ウォーギルト・インフォメーション・プログラム」に代表される占領統治により、悠久の歴史によって培われてきた日本人のアイデンティティは打ち消されてしまった。

学校教育では、悠久の歴史と近現代史を軽視しているといっても過言ではない。我々は、先の大戦を通じて、多くを失い多くを学んだことを深く理解すべきである。人類史上初めて、兵器としての原子爆弾を投下され多くの先達を亡くしたことは紛れもない事実であり、日本は「原体験」を通じて世界に対し「恒久的世界平和」を訴えることのできる唯一の国である。しかし、現実はどうだろうか。偏重な考えを声高に叫び戦争を美化する論調と、戦争指導者や日本人の自信と誇りを否定する論調に共鳴する両極端の意見に偏り過ぎている気がしてならない。今を生きる我々にとって重要なことは、自らの目と耳と頭で過去の歴史をしっかりと直視することである。「賢者は歴史に学ぶ」という言葉があるように、我々は、他国に例のない大きな経験を得ている。戦後７０年が経過しようとしている今、過去に立ち返り後世へと受け継ぐべき「悠久の大義」を忘れてはならないと思う。

【歴史認識とは何なのか】

昨今、「歴史認識」という言葉が新聞紙上に踊らない日はないと言ってよい。歴史は勝者にとっての叙事詩のような側面を多く含んでしまう傾向が強い。戦争があったことは「事実」であるが、勝者・敗者と立場が変われば「事実」への認識は異なり始め、それぞれの「真実」、すなわち歴史が生まれるのである。我が国がかつてアジア圏において関わりや争いを起こした中国・韓国・台湾は、歴史に対してそれぞれ異なった評価をしており、その当時の各国の環境やその後の教育が歴史認識を作り上げていった。

皆さんにとって先の歴史的な大戦は一体どのように映っているだろうか。戦争を経験した我々の祖父母の世代の方々に聞くと、「防空壕に落ちた焼夷弾の炎を懸命に消して、とにかく生き抜くために必死だった」と言う。一方、我々戦後世代にとっては、「大空襲や原子爆弾を投下した米国に負けた戦争」という認識が多数を占めるのではないか。また一方、中国人にとっては、賛否は別として徹底した歴史教育により、「日本に侵略された」という認識であるだろう。また、日本国内では他国の欠点を大袈裟に書いたセンセーショナルな

週刊誌記事が喜ばれ、他国においても我が国の悪口を喧伝する政治家が持て囃される。偏った情報により誤った認識が増殖していることは極めて危険なことではないか。これほど根本的な歴史認識の相違がある中で、人と人とが対話をしようとしても限界があるように感じられる。

しかし、双方が帰結すべき唯一のことは、「同じ過ちを繰り返さない」「多くの国民を無差別に殺害する残虐な戦争を繰り返さない」という未来志向の発想である。未来志向を持って前向きに議論していくためにも、互いの歴史認識のみを全面に繰り出していても前進はない。お互いの立場を理解し合い、ともにできる限りのことを尽くすためには、異なった歴史認識を持った日本人を含めた多くの国の人々が膝を突き合わせて堂々と議論し、その中で相互に分かり合える部分を探り出していくことが肝要である。

「国家間の問題は政治家が考えるもの」という他人事の発想が諸問題の根底にあると強く感じる今、我々青年会議所が目指す「恒久的世界平和の実現」「明るい豊かな社会の実現」という原理原則を有効に掲げ、我々が有するＪＡＹＣＥＥの世界的ネットワークを最大限に活用し、国家間の枠を飛び越えて共感し合うために積極果敢に行動すべきである。

【歴史教育について考える】

義務教育である小中学校において我々が学んできた歴史教育は、旧石器時代や稲作に始まり、明治維新から昭和・平成へと続いている。史実に基づき順序正しい教育を受けていることは確かであるが、「真実」と「事実」という言葉を通すと些かバランスに欠けた内容であると感じる。我が国には「古事記」「日本書紀」という「記紀」が存在する。その内容については「事実」ではなく「真実」であると議論されるように、我が国最古の歴史書として、その存在は学ぶものの、内容についてはほとんど触れられない。

さらに、近現代史については、義務教育過程全般において割かれる時間が圧倒的に少ない。その上、「事実」を「異論」と唱える歴史書や論調が後を断たず、何が「事実」なのか分からなくなり、自国の歴史に自信を持てる人が極めて少なくなっている。実際、近現代史と言われる明治以降の歴史は未だ解明されていない点も多く、主張する立場や思想によって多様な「事実」が横たわっている。

しかし、重要なことは、我々一人ひとりが建国の神話や自国の歴史を直視し、しっかりとした論陣を張り、自信を持って自らの意見を堂々と主張できるようになることである。今、我々の世代で、「記紀」と「近現代史」について自らの意見を持って議論できる人は極めて少ないのではないか。我が国はいつ、誰が建国したのか。諸外国では国民のほぼ全員が回答することができるこの問いに、日本ではほとんどの人が答えられないというのは異常事態である。我々日本人も、今一度、建国の神話や自国の歴史に自信と誇りを持ち、歴史リテラシー能力を高め、歴史の「真実」と「事実」を見つめ直すべきである。

【グローバルな視点を持った名古屋に】

インターネットの世界的普及に伴い、我々は自宅やオフィスのデスクにいながらパソコンを一叩きすれば、世界中のニュースや情報が手に入れられるようになった。またＥメールに留まらずＳＮＳの急速な発展により、携帯端末一つで世界中の人と瞬時にコミュニケーションを取ることができる今、自らの意思一つで視野を広げてつながりを持つことは極めて容易となり、日進月歩でボーダレス化が進み、異文化コミュニケーションを避けては通れない時代に突入している。

鎖国時代の日本にありながら、幕末維新の志士たちの中にも海外で大きな学びと体験を得て、日本の将来を案じて開国政策や国家運営に勇躍した者がいた。それと同様に、インターネット等のバーチャルな情報のみを鵜呑みにするのではなく、自ら扉を開けて海外の地に一歩踏み出せば、自分の目で見てそして体験することにより様々な衝撃を体感することができ、人生や事業に新しい閃きやヒントを得ることが可能となる。そして、自身の置かれている活動地域を俯瞰的に見ることができ、世界の中に自分が生かされていることを知り、日本や名古屋のまちに生まれたことを感謝できると思う。

今後、我がまち名古屋は、航空宇宙産業の発展やリニア新幹線の開通、さらには２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に応じて、今にも増して外国人との接触が進むであろう。その時に引っ込み思案で排他的と揶揄されるような「名古屋人気質」を引きずっていては自ら成長にストップをかけることになるだろうし、産業を中心に成長してきた名古屋にとって、迫り来る人口問題に対してもグローバルな視点を確立しておくことは大きな選択肢を生むだろう。そのために、青年会議所が有する世界規模のネットワークを最大限に活用し、他国の文化や情報を会員や市民、そして次代を担う子供たちへと幅広く提供する必要がある。また、名古屋の進化を視野に入れ、さらなる学びに結びつくであろう海外ＪＣとの新たなつながりにもチャレンジしてみたい。

【親世代の責任】

我々は今を生きる青年経済人であると同時に、多くは次代を担う子供たちの親であり、また子供たちを正しい方向へ導くべき責任世代である。我々が幼い頃、近所の大人たちは物事の道理を外れた行いをする子供たちを我が子のように真剣に叱ってくれた。そのことに対して文句を言う親もまた少なかった。ところが今の時代、子供たちの非行に見て見ぬ振りをする腑抜けた大人たちが何と多いことか。また、親としての最低限の責務すら放棄した結果、養護施設へ預けられる子供たちが急増している。

教育の第一歩は、親が子供にすることであり、それは我が子に対する無償の愛を源とす

るものである。この無償の愛こそが親としての教育の信念を生み出し、親の行動を通して初めて教育に説得力が生まれる。「子供は親を映す如実な鏡である」という言葉通り、子供は親の背中を見て育つ。我々が親孝行とは何たるかを実践し、道徳心に即した行動をしていなければ、多くの子供たちは同じことを繰り返すのである。ＪＣも会社も家庭も同じように、親や先輩に憧れて追いつき追い越していくことで、そのコミュニティは段階的に強化されていくものである。次代を担う子供たちに親の偉大さを背中で示し、そして家族というコミュニティを通して道徳心や郷土愛、国家観を伝えることのできる真の「親学」を見つめ直してみたい。

【教育に可能性を】

少にして学べば即ち壮にして為すことあり。壮にして学べば即ち老いて衰えず。老いにして学べば即ち死して朽ちず。

（言志晩録　第６０条　三学戒）

これは、幕末の儒学者佐藤一斎が人生を通して学び続けることの必要性を説いた言葉である。そもそも学ぶということは、「豊かな生活を送るための基礎」であるとともに、新たな知識を得る「喜び」だと考える。知識がない限り「知恵」は生まれず、一人の人間としての「思想」や「哲学」が見出せず、新たな一歩とも言うべき「行動」に移すことができない。我々人間は生まれながらにして親というフィルターを通し、言葉や愛情、そして人としてのルールや徳を知り、知識を得る喜びを見出している。教育という観点に置き換えるのであれば、人生の最初の教師は紛れもなく「親」であり「家庭」なのである。そして成長過程で「地域」と触れ合って社会性を養い、文化や風土、自然を通して感性を研ぎ澄ましていく。こうした生活環境の中で学ぶことの喜びと意義を知り、「学校」での教育が活きてくる。今この「教育トライアングル」ともいうべき「家庭」と「地域」と「学校」のバランスが歪んでいる気がしてならない。教育のすべての責任を学校になすり付ける「モンスターペアレント」や、社会のルールを逸脱した子供たちを見て見ぬ振りする地域の大人たち。本来それぞれが持つはずの特性と役割が余りにも不明確である。これらの複雑な問題の解決策を見出すため、親世代でもある我々ＪＡＹＣＥＥが教育トライアングルの第一歩である家庭の教育を見つめ直すとともに、地域教育のあり方をも考え、実践していきたい。

また、福沢諭吉の「学問のすゝめ」に教育の基本は「知育・徳育・体育」の三育であると説かれているように、知識と心と体力の向上はいずれも必要不可欠な要素である。一つ目の知育においては自然体験を通じて学ぶことを見つめ直してみたい。徳育については、

根本的に人間が持っている「感謝する気持ち」や「おもいやり」「相手の立場に立って考え行動すること」が源である。「世のため人のため」という言葉を大切にして、我々日本人が悠久の歴史によって培ってきた「徳」を子供たちに広めていきたい。体育は、目標に向かって努力する精神性と達成した時の喜びと感動、さらに礼儀や規律そして耐えることの必要性を学ぶことができる。名古屋青年会議所も長年の活動の中で、今では多くの市民に浸透した名古屋シティマラソンやわんぱく相撲を展開してきた。５年後に控える東京オリンピック・パラリンピックに向けて、名古屋から日本全国に発信しうる新たな青少年スポーツ事業を検討してみようではないか。

【地域のリーダー】

バブル経済崩壊以降、日本全国と同様に名古屋においても利己的な風潮が蔓延し、「公」の意識が希薄になってきた。これは、人間力溢れ当事者意識の高い人材が育つ環境の醸成を阻害する要因にもなる。当事者意識が高い人材が集まるまちは、自ずと未来を描くことができるまちに進化する。つまり、未来に希望を見出すことができる当事者意識の高い人材の育成こそが、「公」の発展を実現させることとなる。自分の確固たる信念を諦めることなく貫き通すことで、社会に夢や希望を与えまちの未来を切り拓くことができる卓越した人材が名古屋には多数存在する。しかし、残念なことに世に広く知らしめるステージが少ないのも事実である。名古屋の未来をともに描くことのできる環境をＪＣと共有し、世の中や自らの故郷を想い、凛然たる姿勢で生き抜く力を存分に発揮する人材を応援したい。

【日本型経営を見つめ直す】

戦後、日本人は愚直なまでに真摯な姿勢により、「良いモノ」を作り世界から信頼を得てきた。「メイドインジャパン」なら安心安全という神話は、一朝一夕に作り上げられたものではなく、長い時間をかけて多くの先達が培ってきたものである。しかし今、その神話は「嘘」という悪魔に犯され音を立てて崩れそうになっている。最近の日本では、社会全般に余りにも当然のように「虚偽」が横行しているのではないか。２０１３年後半から振り返ってみるだけでも百貨店やレストランでの食品偽装表示に始まり、大規模な偽装米事件や医薬品データ改ざん。まさしく「正直者が馬鹿を見る」事象が溢れかえっている。

モノ作りの貿易国家として成長を遂げてきた日本にとって、製品の信頼性なくして未来はない。「嘘をついてはいけない」ということは、学校で教わることでなく家庭内の親と子

供の教育にて教えるべき人としての必要最低限のルールである。そのような根源的な問題が何故日本を代表する企業や組織で起きているのだろうか。その場凌ぎの誤摩化しや目先の利益を追求するがあまりに行う偽装は長続きしないばかりか、石に刻むごとく積み上げてきた信頼を一気に崩壊させる。

かつて世界を震撼させた「エンロン事件」や「ワールドコム事件」を代表とする企業不祥事が相次いだ際に、企業は利益の追求の前に社会的責任を自覚すべきであるという意見から「ＣＳＲ」という言葉が一世を風靡し、日本においても多くの企業が取り入れようとした。しかし、日本には多くの企業がかねてより培ってきた「日本型ＣＳＲ」と呼ぶべき思想を持っていることを忘れてはならない。この根底には、目に見えないものへの畏敬の念や日本人独特の「恥の文化」が根づいているのではないだろうか。ある事象を捉えて「それは法律違反だ」と嗜められるより、「それは世間から見て恥ずかしいことだ」と言われることの方が我々日本人にとって厳しい言葉であり、こうした風土が日本企業や経営者の倫理感として醸成されているように思う。

こうした日本独自の経営思想を今一度見つめ直した上で、さらに「悪いことをしない」というより「良いことをする」「事業を通じて公益に広く貢献する」といった価値を広く浸透させるべきではないか。また、第６４年度より取り組み始めた社会起業家育成の根底にも、この日本型ＣＳＲの源が流れていると確信している。第６５年度もボランタリー経済の本流ともいうべき社会起業家育成に注力しつつ、日本人が古くから培ってきた日本型資本主義経営を両軸として、「公益資本主義経済」を名古屋から広く発信し、企業を活気溢れるまちづくりの源としていきたい。また、我々会員も青年経済人として自身の企業を総点検することで、社会の公器となりうる地域企業の発展に寄与していきたい。

【ハイブリッドな運動を】

我々が住まう「名古屋」は、東京と大阪の中心に位置し、古くから交通の要所としても栄え、織田信長や豊臣秀吉など歴史上の豪傑を多く生み出し、開府４００年以上を誇る歴史あるまちである。さらには、約２２７万の人口を有する自信と誇り溢れる大都市であると同時に、成熟した他の大都市と比較して未来に向けて大いなる可能性と将来性を秘めているまちであるといえる。

ここで今一度原点に立ち返り、我々の運動を見つめ直してみたい。我々は先駆けの団体として未来を見据え実行力ある運動を市内全域に展開しているが、これまでのこうした運動を堅持しつつ、名古屋のまちを形成する１６区の抱える地域特性にフォーカスした運動を展開するハイブリッド思考を取り入れるべきではないだろうか。第６４年度は「わんぱく相撲」を通して地域に根差した活動を展開し大成功を収めた。これを一つの成功体験と

し、地方自治重視が声高に叫ばれている今こそ、我々ＪＡＹＣＥＥが公器となり１６区の市民が主役となって、自らの課題と解決策を見つけ出す主体的で能動的な真の地域活性化運動を展開していきたい。

【防災と地域コミュニティ】

１９９５年1月１７日に発災した阪神・淡路大震災、そして２０１１年3月１１日に発災した東日本大震災。地震大国の我が国は過去、大震災を何度も経験してきた。そして今、我々の住まう地域にも近未来必ず訪れると言われている南海トラフ巨大地震が潜んでおり、もはや他人事と言っていられない時期が到来している。その中で、我々の危機感は一体どこまで醸成されているのだろうか。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という諺があるが、目を覆いたくなる被災地の悲惨な状況を目の当たりにした発災当初の意識は薄れていないだろうか。今後起こりうる巨大地震発災の際、過去の教訓を活かせない我々がいたとすれば、それはまさしく「愚民」と言われるほかないのではないかと強い懸念を感じる。

では、この大自然の脅威に対し地球の新参者である我々ができることは何なのか。それは、我々人類の生み出した科学や予測を過信せず、過去の悲惨な震災を自らの「教訓」と捉え準備して、自身の問題に置き換え真剣に議論することではないだろうか。我々は経験から多くの学びを得ることができる生き物である。「自然」という唯一無二の力の前には無力であることを認識し直す必要があると思う。

現在、地域防災という観点で全国各地の自治体が様々な取り組みを行っているが、この主役を担うべき町内会や自治会への住民の加入率は低下の一途を辿り、我々がこれまでも復活を願い取り組みを続けてきた「向こう三軒両隣」と言われるような地域コミュニティはもはや瓦解していると言っても過言ではない。さらには１６区に跨がる広大な名古屋のまちにおいては、一口に防災と言ってもそれぞれの地域によってプライオリティは大きく異なることだろう。

こうした目前の問題に対し、誰が主役となり主体者となって行動すべきだろうか。それは名古屋全域に「明るい豊かな社会」の実現を目指し活動してきた同志とも言える、３０００名を超える志高きＪＡＹＣＥＥが立ち上がる以外ほかに手段はないと思う。まずは１６の区に所在する正会員や特別会員によって独立独歩の新たな地域コミュニティを創造したい。はじめは少人数の集いに過ぎないかもしれないが、志を共有し絶えることなく灯し続けていけば、いずれ地域に根差したムーブメントに変わるだけでなく、本物の地域自治への活路を見出せると確信している。

【会員同士の絆を深め、果敢な挑戦を続けよう】

名古屋青年会議所は約７００名の正会員数を誇り、全国６９６会員会議所の中においていわゆる「ビッグＬＯＭ」である。しかし、約７００名の正会員の中で運動の本質を理解する会員はどれだけいるのだろうか。我々会員が青年会議所運動を前向きに捉え活動する源は千差万別であるが、その根底には「誰かの役に立ちたい」という利他の精神と、「任せられた役割をやり抜く」という気概、そして「目標達成に向けて突き進む」という覚悟が必ず存在すると思う。

その典型的な例がまさしく理事候補者選出選挙ではないか。利害関係のない仲間たちに支えられ覚悟を決め鬼気迫る想いで選挙戦を戦う立候補者。そして、その姿を目の当たりにし立候補者を全力で応援する委員会メンバー。その熱い行動は大きな躍動を生み出し、会員の歯車ががっちり噛み合った瞬間、全員で大きな一歩を踏み出すことができる。私はこの名古屋青年会議所の伝統事業ともいうべき理事候補者選出選挙に現状の名古屋青年会議所が抱える問題解決のヒントが多く隠されていると感じる。リーダーの大きな役割とは明確なビジョンを描き、メンバーに成長の機会を与え続けることである。怖がらず諦めず対話し続けるとともに、一人ひとりの可能性と役割、そして居場所と出番を見出していきたい。今一度、日本の青年会議所を代表する名古屋青年会議所の活性化を促し、互いの絆を高め合い未来に向けて果敢な挑戦を続けていこう。

【ＪＣの原点回帰】

名古屋青年会議所は２００９年から公益社団法人へと生まれ変わり、７年目を迎えようとしている。従来の予算執行方法や事業構築のあり方も一部変化し、試行錯誤の繰り返しを経て、現在の公益法人としての名古屋青年会議所がある。しかし、公益性と費用対効果を意識し過ぎる余りに自らの活動の幅を狭めていないか。さらには委員会内での活発な議論や積極的な現地調査などの「ＪＣらしさ」を失っていないか。

青年会議所はどの組織にも属さない独立独歩の団体として、世のため人のためを想い、青臭く地域社会の未来を考え先駆けの行動をする唯一無二の青年経済団体である。その自信と誇りを再認識しようではないか。また、予算執行には透明性と公益性、そして、会員の大切な会費を使わせていただくという高い意識を兼ね備えた審査を実施し、議論を重ねるのは当然であるが、諸会議の運営についても、これまでのスタイルを維持しつつ、効率的で効果的かつ本質を突いた議論が可能となるよう進化を模索してみたい。

創立６５年を迎える今、変わらない本質を尊重しながら、その中に新しく変化を取り入れていく「不易流行」の思想を大切にし、理事会構成メンバーそして委員会それぞれが本

来なすべきことをしっかりと理解した上で役割分担し、全会員が足並みを揃え単年度における最大の運動発信を行っていきたい。

【活動への自信を胸に　～情熱とプライドを～】

全国の会員会議所における会員減少に歯止めがかからない。１９９２年のピーク時を境に２１年連続で会員の純減が進んでいる。こうした中、名古屋青年会議所は他の会員会議所に先駆けて会員増強に取り組んできた結果、今の会員数を維持している。しかし、今後の卒業者数を考慮すると対岸の火事ではないことを認識し、一人ひとりが情熱と自信を持って会員拡大に取り組まなければならない。

「ＪＣとはどのような団体ですか」あなたはこの問いに自信を持って答えることができるだろうか。答えは人それぞれのＪＣ観に帰結するだろうが、答えに窮するようでは余りにも寂しいじゃないか。自らの意思で入会し、一言でも子供の未来や地域社会、そして名古屋青年会議所の問題を語ったのであれば、これまでの知識を知恵に変え行動に移し、自らの強靭な哲学を持って論陣を張って欲しい。「入会候補者がＪＣを理解してくれない」「世の中のＪＣの評判が悪い」「家族がＪＣを理解してくれない」このような言葉をよく耳にする。これらは確かに我々の評価そのものであり、真摯に受け止めなくてはならない事実である。しかし、これを理由にして運動をやめてしまえば会員数は加速度的に減少する。ＪＣの過去を敵対視して言い訳の理由にしても何も始まらない。周りが理解してくれなければ、未来を夢見て実行力を持った運動の展開によって理解を求めればよいし、評判が悪いのであれば一人ひとりが己を律し評価を勝ち取ればよい。自分が嫌な思いをしたのであれば我々の時代でそれを止めなければならない。すべての原因を自分事に置き換える度量と気概を持とうじゃないか。

会員拡大は企業営業と同じである。商品は６４年間変わらず「青年会議所」そのものであり、売り手は我々会員なのである。青年会議所がどのようなメリットを入会候補者に提供でき、それがどのように地域を変える源になるのかを自らの原体験を元に熱く語ればそれでよい。仮に原体験が無いのであれば、己の理想を大いに語り、その理想に向けてただひたすらに努力すればいい。そのためには会員拡大の意義目的を全会で共有し、綿密な計画から生み出されたぶれない目標を軸に行動を起こし続けることが重要である。これらの一連の流れを愚直に実践し、会員拡大の本質が見えた瞬間、我々は胸を張ってＪＣを語ることができる。お互いが傷を嘗め合い組織の愚痴を言い合うような団体であれば必ず衰退する。入会候補者にとって我々の行動や発言がＪＣそのものであることを忘れてはならない。

【結びに　知行合一　～１００人の一歩の実現に向けて～】

最後に皆さんに確認したい。

私やあなた一人にできることがどれだけちっぽけなのかを。しかし、我々一人ひとりがそれぞれの立場で当事者意識を持ち、名古屋プライドの覚醒による志と強靭な思想、そしてリーダーシップを発揮すれば、それは煌々と光り輝く無限のパワーへと進化するということを。

役割や居場所がない者など存在しない。ただし、自ら決断し一歩を踏み出さなければ今と何も変わらないし何も感じない。人は理想を追い求め、それに追い着いた時に感動を覚え、また新たな扉を開こうとするのだ。だからこそ小さな一歩が「１００人の一歩」という大きな一歩を踏み出す源であることを忘れないで欲しい。歩幅が小さくてもいい。時間がかかってもいい。まずは踏み出す勇気を持とう。今いる場所を、これから踏み出す場所を、そしてそこで出会った人のことを素直に深く感じていこう。その感じた先に生まれるマグマのようなエネルギーに身を委ね、全力で動き出そう。

我々に残されている時間は限られている。考え込むよりまずは感じて行動しよう。すべてはそこから始まる。

これは決して絵空事ではなく、我々の強靭な精神によって実現できる未来だ。私はそう信じて疑わない。

覚醒せよ、名古屋プライド

踏み出していこう、１００人の一歩を目指して